

Eu sou Saúde!

～わたしはサウーヂ！ふたたび浅草へ！～

Sinopse (あらすじ)

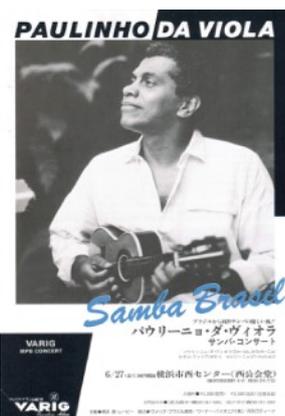
1. 横浜・野毛の街からサウーヂは生まれた

我々は「サウーヂ」というエスコーラ・ヂ・サンバである。1986年に横浜に生まれ、37年の歴史を刻んでいる。

現存するブラジル最古のエスコーラである「マンゲイラ」をこよなく敬愛している。そのマンゲイラから受け継いでいるのは、チームカラーである「ヴェルヂ・イ・ホーザ（緑とピンク）」や、特徴ある原初的なサンバのグルーブだけではない。ブラジルにおけるマンゲイラと同様に、サンバを通じて地域に根差し、皆が集まって人生を楽しむ、コミュニティとしての存在になりたいと願い、活動している。

我らの生きざまは、ホームタウンである横浜・野毛の気風に貫かれている。戦後に闇市が立ち並んだこの街に、人々は生きるために群がってきた。大岡川のハシケ船に宿をとり、港の荷役に汗水を流した。食うや食わずの暮らしの中で、何より慰めとなったのは、酒と大衆芸能だった。やがて毎日の暮らしが穏やかになって

も、野毛の街にはその名残がある。浜風に吹かれて集まる余所者を暖かく受け入れ、憩いをもたらす酒場が軒を連ねる。橋のたもとには大道芸人たちがいる。芸事には何より熱心であり、洒落な笑いで観衆を楽しませる。夜の街を歩けば、アメリカ譲りのジャズがあちこちから聞こえてくる。ここには軽妙さを愛し、新奇な音楽を喜ぶ土壌があった。そんな街にあった一軒のジャズ喫茶で、「サウーヂ」は生まれた。ポルトガル語で「乾杯！」を表すその名にふさわしく、昼間の練習後は酒場での打ち上げを欠かさず、杯を重ねた。その席で楽しんだのが、卓を囲んで行う、気軽なサンバ・セッションである「パゴヂ」だった。夜の酒場から漏れる、歌や弦、太鼓の響き。それを耳にした街の住人達は、サウーヂを放っておかなかった。毎年の祭りやイベントに呼ばれ、サウーヂは、地元横浜・野毛のエスコーラ・ヂ・サンバとして、この街に愛される存在となった。



2. 浅草サンバカーニバルへの挑戦と成長

日本におけるサンバの祭典である、浅草サンバカーニバルにも、サウーヂは創立以来出場を欠かさなかった。1986年、同年のリオのカーニバルにおいてマンゲイラが優勝を勝ち取った曲である、「テン・シン・シン」を浅草に持ち込み、同じく敬愛するマンゲイラからとった「緑とピンク」をまとって、サウーヂは浅草にとびこん





だ。先達のエスコーラに教えを請い、他のエスコーラと切磋琢磨しながら、年を重ねていった。

毎年繰り返す、浅草サンバカーニバルに向けた制作の道のりは、仲間と高みを目指す山道のようなものであった。構想をもって道筋を見定め、時に乗り越えがたい岩場に出くわしながら手を引き合って、前進する。

我々の拠点であり、第二の我が家であるサウヂ・アトリエをはじめ、急な坂の上、ダルマ船の船倉、様々な場所が作業の舞台となった。何十体もの衣装作りを引き受け、接着剤とスパンコールにまみれる男もあれば、巨大な発泡スチロール像を削り出すべく、仕事帰りに毎晩、白い粉に埋もれる女もあった。締め切りに追われながら、眠気と戦う毎日。どうして仕事に加えてこんなことをやっているんだろうね？と笑い交わしながら、最後の乾杯で労をねぎらって、また次の日も作業に集まるのであった。



時に協力がうまくいかず、争いが起きることもあった。高みを目指す意志は共にしていても、とる道のりの違いや、些細な行き違いから、摩擦は生まれる。互いに熱量をぶつけ合う制作の過程の中で、様々な事情ゆえにエスコーラから身を引いた仲間もいた。もとより自由意思で集まった者同士ではあるが、辛い思い出を胸に離れた仲間のことも、我々は決して忘れない。

そうした思いを胸に、過剰なるエネルギーを発散させながら、1年、また1年と創造のサイクルを繰り返していった。それは

同じ場所での転回ではない。新たな仲間との出会いによって、新たな表現が生まれ、退いた仲間もサウヂの歩みを支えるサポーターとなることで、我々をつなぐ人の輪は、いよいよ大きくなっていった。

こうして毎年浅草に向けて活動に取り組む中で、目指すカーニバルとは何かを自問自答していった。その過程で見つけたのが、「最高に美しいカーニバル」という言葉だった。パレードの筋書き、楽曲、装飾、ダンス...自分たちが作り上げるものに手を抜かず、あつと驚かせるような美を追求する。浅草のパレードコースで、気持ちよく演じるために、沿道にあふれる観衆とサンバの歓びを交わしあい、今日が最高だ！と思えるような1日のために、1年間の汗を流す。究極の自己満足！とすることもできる。

「最高に美しいカーニバル」を目指す道のりは、この上なく楽しいものであった。どの年の浅草をとっても、その年に出場した者にとっては、語りつくせぬ思い出となっている。自分が初めて出場した年、初めて満足いくものが作れた年。時に制作の努力が報われず、悔しさに沈んだ年。

2008年の浅草では、出走がまさに始まろうとする瞬間、滝のような豪雨がサウヂの隊列を襲った。衣装に付けた羽根は見る見るしぼみ、音響は断線して、マイク



の声も聞こえなくなった。その中でも、出場者は喉をからしてテーマ曲を叫び歌い、体の芯から炎を燃やして、肌を刺す雷雨を乗り切り、全員で完走した。

2010年。サウーヂは「愛を讃える」というテーマで初優勝を飾った。夏に近づくほどにメンバーの気分はかつてないほど高まり、そして浅草で完全燃焼した。波打つベッドのごときサンバの躍動が、沿道の観衆にも伝わり、魂が交歓し合う絶頂の瞬間であった。



震災による1年の中断をはさんで、2012年。多くの命が失われ、人の心が沈む中で、サウーヂは「健康に乾杯！」をテーマとし、すこやかに生きる喜びを表現した。我々の化身「サウーヂくん」が生命を得て現れ、愛すべき生き様が万人の共感を得た。

「ありがとう、サンバ！」を歌った2015年の浅草は、最もサウーヂが輝いた年である。この年のサンバ・ヂ・エンヘッドは、サウーヂ史上初めて日本語で制作された。そして日本語で歌われた曲として初めて、カーニバルで優勝した。

サンバに対する感謝の気持ちを、演者と観衆に伝えたい。そのためには、自らの言語で歌うべきである。この必然から、ロックやラップなどの音楽もかつて越えてきた困難な壁を、サンバにおいて取り組み、鮮やかに乗り越えた。サウーヂの歴史を塗り変え、日本のサンビスタに、はるかマンゲイラにまで愛される、金字塔となった。



3. マンゲイラとの絆を結ぶ



こうしてエスコーラとして成長を重ねる道のりの中で、サウーヂはブラジルの先達マンゲイラとの関係を築いていった。40年近く前にさかのぼるマンゲイラとの出会いは、当初全くの偶然である。伝説のサンバ歌手森本タケルの歌うマンゲイラに魅了された、創立メンバーのひとり中原仁が、サウーヂの浅草初出場にあたり、マンゲイラのチームカラーと楽曲を持ち込んだのがきっかけであった。以来、サウーヂは「ヨコハママンゲイラ」を自称し、情報の少ない時代に、ブラジルに渡ったメンバーからの伝聞を頼りに、マンゲイラ

流のサンバを目指して、手探りで進んでいった。

海の彼方への憧れであった、マンゲイラとの交流が実現するきっかけとなったのが、マンゲイラから公式日本大使に指名された佐久間圭輔であった。当時マンゲイラのプレジデントであったアルヴィーニョとの友情をきっかけに、マンゲイラツアーとして毎年多くのメンバーが現地に渡り、交流を行った。そこでは、衣装づくりや演奏のスタイルといった

具体的な要素も学んだが、それ以上に感じ取れたのは、「サンバを愛し、サンバの中で生きる事が喜びとなっている、サンバで結びついた共同体」というもののあり方だった。地球の裏側でも、やはり人生は苦しい。その苦しさの中からサンバが生まれ、お互いの心を結びつけ、喜びをもたらしている。サンバをすることを通じて、各々の生を、この街を、より良きものにしたいという希望こそが、マンゲイラに生きる同志たちから、我々が受け継ぐべき魂であった。



そうしてマンゲイラを訪れる一方で、来日するマン



ゲレンシもあった。2013年、2016年、2019年...明日を築く若者から偉大なる古老まで、多くのマンゲレンシがサウーヂのヂスフィーレに参加してくれた。彼らが来日して驚くのは、故郷の丘で聞くのと同じ「マンゲイラ讃歌」を、地球の裏側の日本で、大勢が熱唱する様子であった。遠い昔、ブラジルから海を渡ってやってきた、マンゲイラの種子が、数十年の交流を養分として、ここ

日本で立派な木となっている様子を見て、マンゲイラの元プレジデントは、サウーヂを「我らが兄弟、東洋の代表」と呼んだ。我々は、これからも北半球においてヴェルヂ・イ・ホーザのバンデイラをはためかせ、マンゲイラの魂を受け継いだ弟分として、ますます豊かに、緑とピンクの大樹たらんとしていくところであった。



4. サンバの灯は絶やさず

しかし、2020年、世界を悪疫の災禍が襲った。誰もが口を覆い、息をひそめて巣にこもることを余儀なくされた。あらゆる集い、祭りごとは中止となった。繰り返される流行の波におびえ、人の気持ちは萎縮した。

世界の国々も国境を閉ざし、これまで行われてきた草の根の交流も大きなダメージを受けた。互いに行き来ができない中、かろうじてオンラインによる消息のやり取りを通じて、無事を確認め合う日々が続いた。

サウーヂにおいても、仲間同士会うこともできず、新たな仲間を加える機会も無くなった。各地でのパフォーマンスも行えず、サンバの魅力を直に伝えることもできなくなった。衣装の調達や技術の交流のために、マンゲイラをはじめ世界とつながっていたサンバのネットワークも、リアルでの往来を絶たれ、息も絶え絶えとなった。

浅草サンバカーニバルも、演者と観衆が生息の息吹を交わしあう、その魅力のゆえに、中止を余儀なくされた。我々のコミュニティにとって、1年間をかけて取り組んできた聖なる遊びともいえるカーニバルの巡りが絶たれた。これはまるで、何年も冬が続き、木々が芽吹いて果樹を実らせるサイクルが途絶えたのと同じく、コミュニティの営みにとって重大な危機であった。

しかし、冷たい土の下で、希望の種子が春を待つように、静まり返った街の奥でも、我々はサンバの灯を絶やすことはなかった。

愛するマンゲイラ讃歌を、遠く離れあった自宅から録音し、ミックスしてオンラインで配信した。その動



画はマンゲイラの仲間にも届き、彼らもまたカメラの前で歌って、サンビスタ同士の友情を温めあった。



Exaltação à Mangueira (Samba em casa)/Saúde Yokohamangureira



G.R.E.S SAÚ...
チャンネル登録...



👍 86



🔗 共有



2020年の浅草サンバカーニバルで我々が演じるはずだったテーマ「アマゾンを守れ」は、楽曲が制作され、動画となった。無念の中断ではあったが、サウーヂが伝えたかった思いは、一つのサンバ・ヂ・エンヘードとなって、歴史に残ることになった。

「どうしてもサンバがやりたい。サンバ無しでは生きていけない。」3年以上の忍従の日々の中で、私たちが心の中に秘めていたのは、その思いであった。それは、「エスコーラ・ヂ・サンバ・サウーヂ」の旗のもとに集った仲間たちが、37年の歩みの中で変わらず持ち続けた情熱である。サウーヂの刻んだ歴史こそが、カーニバルを奪われた年月の中で、我々を生き延びさせる原動力となっていたのである。



5. 復活した浅草で、サウーヂは未来に向かって歌う！

2023年、4年ぶりに浅草サンバカーニバルが復活する。いまだ口にマスクは残っているが、サンバを通じて演者と観衆がともに喜び合う、生命の祭典が戻ってくる。

我々は、日本にサンバを広め、エスコーラ・ヂ・サンバを根付かせた、浅草サンバカーニバルの復活を喜ぶ。復活に力を尽くした浅草の街衆と、サンバを待ち望んでいた無数のファンに、尽きせぬ感謝をおくる。

そして、復活した浅草サンバカーニバルを、いつそう豊かに発展させるために、同じく芸能の街である、横浜・野毛に支えられた我々サウーヂが、どう向き合っていくかについて思いを巡らす。

まずは、我々がはぐくみ、はぐくまれてきた、サンバを愛するコミュニティとしてのサウーヂを見つめなおすことが必要だ。我々が今年浅草に出場できるのは、これまで連綿とサンバを愛し続け、真剣な大馬鹿者として遊び、楽しんできた先人たちの思いを受け継いでいるからだ。そしてサウーヂという場に集い、いつでも楽器片手に杯を酌み交わし、笑いあってばかりいる、仲間とのつながりのおかげである。

サウーヂは、横浜・野毛の街に生まれ、マンゲイラを師と仰いで育った。唄と乾杯をこよなく愛する仲間が集う、娯楽の殿堂である。この歴史を次の世代に語り伝えることで、コロナ禍で傷んだ我々自身の団結を取り戻したい。

次に、待ち望んだ浅草サンバカーニバルの舞台上で、サウーヂであることの喜びを観衆に伝えたい。我々自身の歴史、サンバを愛し続けてきた情熱を語る。そしてサウーヂがこれ



まで目指してきた「最高に美しいカーニバル」を再び浅草の路上で演じ、「サンバカーニバルが復活して良かった!!」という喜びを、ともに分かち合えるようなダンスフィーレを見せる。

そして、サウーヂは、未来のためにカーニバルを行う。これまで培ってきたマンゲイラとの交流を新たに、伝統と革新を併せ持つその姿に学ぶことで、偉大なる緑とピンクの大木から豊かなサンバの養分を吸収する。そうして我々自身が豊かな樹木として育ち、ヴェルヂ・イ・ホーザの兄弟として、サンバの歓びをその木陰にもたす存在となる。

この木陰では、太鼓が歌い、笑う声、乾杯の響きが絶えない。肌の色、年齢、性別を超えて、あらゆる人々が集い、ともに助け合い、活発に生きている。

皆の心には、サンバに対する情熱と美学がある。遊びに対して真剣であり、常に好奇心にあふれている。変化を恐れず、きのうまでの自分を超えていくような、型破りでユニークな表現を追求する。

ここでは、誰もがサンビスタとして生きている。サンバを誇りとし、自身の表現として。責任を伴う真の自由を、我々は持っている。

サウーヂは一人一人が生涯を通じて結びつくコミュニティであるとともに、人の時間を超えて存在する。永遠に未完成でありつつ、美しいサンバの高みを目指して、真摯に歩む。

100年後にもサウーヂは歩み続けるだろう。そしてサウーヂを、サンバを、永遠に不滅のものとし、昇り龍のように繁栄させてゆく。

我々自身が目指すこの姿を、サウーヂはカーニバルで歌う。浅草を、世界を、緑とピンクに染めよう。**Eu sou Saúde! わたしはサウーヂ! ふたたび浅草へ!**

